

大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画(第2期)に頂いたご意見と回答

説明会: 3月11日(日)吉野町中央公民館にて開催 参加者3名

HPによる意見募集: 募集期間 2月19日(月)～3月13日(火) 提出意見2通

項目	意見の概要	回答
モニタリング調査について	糞粒法、区画法、ルートセンサスの調査結果の値が異なり、どれが真の値なのか分からない。	大台ヶ原におけるニホンジカの生息密度調査は、現時点で全国的に用いられており、かつ、実施可能な3つの調査法を採用しています。それぞれの調査は手法が異なり、それぞれ特徴を有していることから、結果的に推定される生息密度の値は異なります。 いずれの調査結果も推定の生息密度であり、大台ヶ原に生息するシカの個体数の実数とは異なりますが、増減の傾向等大まかな生息状況を把握するには有効であると考えています。 なお、参考資料として各調査手法についての解説を追加しました。
	ルートセンサスの結果から、西大台で生息数が増加している可能性があるとしているが、糞粒法の結果では2005年から2006年で数値が減少している。これらの調査結果の誤差範囲はいつか?	いずれの調査法でも年変動があり、調査時の天候などにより精度が異なることが考えられますが、継続的に実施することにより個体数変動の把握には有効と考えます。 西大台の生息密度についても、他地域と比較して高い密度が維持されており、ルートセンサスの結果では増加傾向である可能性が懸念されることから、今後も継続的にモニタリング調査を行いより正確な情報の把握に努めます。
森林衰退の経緯について	剥皮状況調査の結果が剥皮と枯死との関係をどのように示すのか?	剥皮状況調査については、平成17年度ニホンジカ保護管理部会において、これまでの調査結果を整理し、「剥皮の程度が大きくなるほど枯死する割合が高くなる」との結論を得ています。
	大台ヶ原の森林植生の衰退については、大気汚染による酸性雨、酸性霧、オゾンなどの影響を考慮すべきであり、大気汚染の調査並びにその影響の調査を行うべき。	酸性雨についても、大台ヶ原の森林生態系の衰退の要因の一つとなっているとの指摘はありますが、現在のところ明確な因果関係を示す研究結果等は報告されていません。 モニタリング調査については、現段階で因果関係がある程度明確な要因のうち対策が実施可能なものについて実施しています。
	西大台のスズタケをシカが食べたという証拠はあるのか?その他の要因で枯死したのではないか?	西大台におけるスズタケの衰退の原因については、現段階で必ずしも明確にはなっていませんが、防鹿柵内ではスズタケが回復傾向にある場所が確認されています。今後ともスズタケを含め植生の状況についてモニタリングを継続します。
現行計画の評価について	個体数調整の結果、生態系にどのような影響があったのか評価すべき。	個体数調整開始から5年しか経過しておらず、また、生息密度の明確な低減が確認されていないことから、現時点で、森林生態系への影響を明らかにするのは困難ですが、今後ともモニタリング調査を継続し、影響の把握に努めます。
個体数調整について	シカの個体数調整と被害削減の見通しを科学的に説明してもらいたい。	自然植生にあまり目立った影響を与えない生息密度は、これまでの各地での事例等から経験的に平均値で3～5頭/km <sup>2</sup> とされていますが、本計画では、10頭/km <sup>2</sup> まで低減することを目標としています。 なお、現段階では、個体数調整が植生への影響をどの程度緩和するかは定量的には明確にはなっていませんが、モニタリング調査を継続して実施することにより、その効果、影響の把握に努めます。
	銃器によるシカの捕獲はいたずらにシカの害獣化をおおることになる。	本計画の目的は健全なシカ個体群の維持と森林生態系の保全にあり、そのためシカの個体数調整を行うものです。 今後、ホームページ等を通じ情報を公開するとともに、適切な普及啓発に努めます。
	西大台は利用調整地区に指定されたことから、西大台での個体数調整は延期し、慎重に調査検討すべき。	西大台地区利用適正化計画では「相対的に良好な森林が存在し、質の高い自然とのふれあい体験が可能な西大台地区において、自然環境への負荷の増大を防ぐとともに、より質の高い自然体験を享受する場として持続的な利用を図り、将来世代に自然環境を継承すること」を目標としており、大台ヶ原の現存する森林生態系の保全を図ることを目的とした本計画と、相反するものではありません。 なお、個体数調整の具体的な実施場所等については、年度ごとに決定することとなりますが、計画の実施結果等をモニタリングにより検証し、次年度の実施内容に反映させるなど「順応的管理」の手法を取り入れて対応していくこととしております。
	西大台の植生の状況を見ると、シカの密度を下げる必要があると考える。	西大台でも他地域と比較するとシカが高い密度で生息していることから、植生の状況について継続してモニタリング調査を行うとともに、個体数調整等適切な対策の実施を検討します。
植生保全対策について	西大台の防鹿柵については撤去若しくは縮小すべき。	区域保全対策(防鹿柵)については将来的に保護管理の目標を達成した際には、撤去することとしています。
生息環境の整備について	周辺人工林の自然林化に力を注ぐべきである。	周辺地域については、奈良県、三重県ともに特定鳥獣保護管理計画を策定しており、今後とも、これらの計画と連携を図りながら本計画を実施していきます。 また、行動圏調査などの大台ヶ原自然再生推進計画に基づく各種調査結果などの情報を共有化するとともに、計画対象外の生息環境の保全について、林野庁、関連自治体等とも連携した協議会を設置するなどして、森林保全対策、影響軽減対策を調整していきます。 なお、上記の趣旨を明確にするため、7.2.1森林保全について、周辺地域における関係機関による森林整備の取組との連携と情報の共有化等についての記載を加筆、修正しました。
	GPS調査の結果三重県側へシカが移動していることが確かめられたことから、シカの供給源である三重県側の広大な森林を対象とした科学的検討・対策が求められる。	
計画の実施体制について	ニホンジカ保護管理部会に市民委員を追加すべきである。	大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画の実施結果の評価については、学識経験者や関係機関などからなる、大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会及び同ニホンジカ保護管理部会において行われています。 評価委員会等の構成については、これまでも、検討の内容に応じた適宜対応してきており、頂いたご意見については、今後、評価委員会等の構成を検討する際の参考とさせていただきます。
	三重県側の山に詳しい委員を招いて検討すべきである。	
	第三者の科学的評価を受けるべきである。	